

2017年12月15日（金）  
第1回 開場：16:30 | 開演：17:00  
第2回 開場：19:00 | 開演：19:30

アクロス福岡円形ホール  
福岡市中央区天神1-1-1

現代舞楽「織・曼荼羅～博多織の機音による」  
織機から収録された振動とイメージが駆動するシアター作品

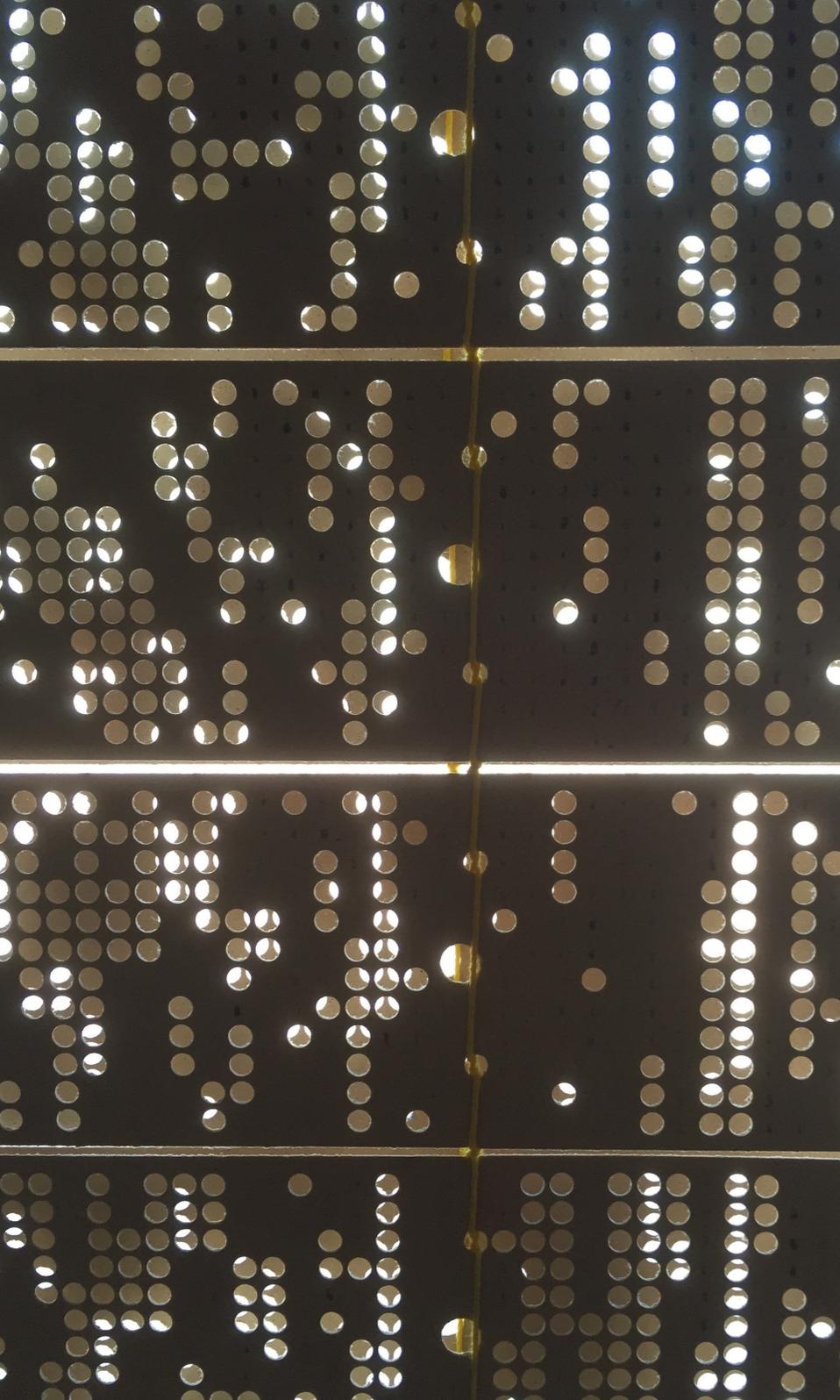


Faculty of Design  
Graduate School of Design  
School of Design  
Kyushu University



主催 九州大学ソーシャルアートラボ  
共催 公益財団法人 福岡市文化芸術振興財団  
後援 福岡県、福岡市、日本アートマネジメント学会  
九州部会  
協力 九州産業大学芸術学部黒岩研究室  
博多織デベロップメント・カレッジ  
助成 平成29年度 文化庁「大学を活用した文化芸術  
推進事業」

[www.sal.design.kyushu-u.ac.jp](http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp)



## ごあいさつ

九州大学ソーシャルアートラボは、平成27年4月の設立以来、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受けて、九州地域の文化や資源を新たなアート表現として発信する試みを継続的に行ってまいりました。焼酎の醗酵音を素材とした現代神楽の創作（平成27年度）、お茶をテーマとしたパフォーマンスの創作（平成28年度）に続いて、今年度は、博多織の機音を素材とする現代舞楽を創作上演することになりました。

博多織の織匠の息づかいと身体の動きから生まれる律動にインスパイアされた作曲家の藤枝守氏が、機音にさまざまな要素を重ねながら新たな世界観を描出します。どうぞお楽しみください。

ソーシャルアートラボ  
ラボ長 尾本章

# 現代音楽「織・曼荼羅～博多織の機音による」

織機から収録された振動とイメージが駆動するシアター作品

## プログラム

Cycle-0 [機音]

Cycle-I [機音・銅鑼・舞]

Cycle-II [機音・銅鑼・舞・ガムラン・笙]

Cycle-III [機音・銅鑼・舞・ガムラン・笙・箏]

Cycle-IV [機音・銅鑼・舞・ガムラン・笙・箏]

Cycle-V: Patterns of Plants [機音・銅鑼・舞・ガムラン・笙・箏]

作曲・構成：藤枝守 九州大学大学院芸術工学研究院教授  
織匠：宮嶋美紀 博多織手織り技能修士・博多おりおり堂  
映像：黒岩俊哉 九州産業大学教授・実験映像作家

出演：

笙 | 石川高、田島和枝

箏 | 中川佳代子、丸田美紀

舞 | 有泉汐織、杉本音音（流留）

銅鑼 | ペ・ヨンジン

ガムラン |

村上圭子、柳井恵子、小谷竜一（パラグナ・グループ）

光永誠、吉柳拓真、松村由佳（福岡ガムラン倶楽部「LOU」）

舞台監督：前原寿代

音響：須藤力（モルグ社）

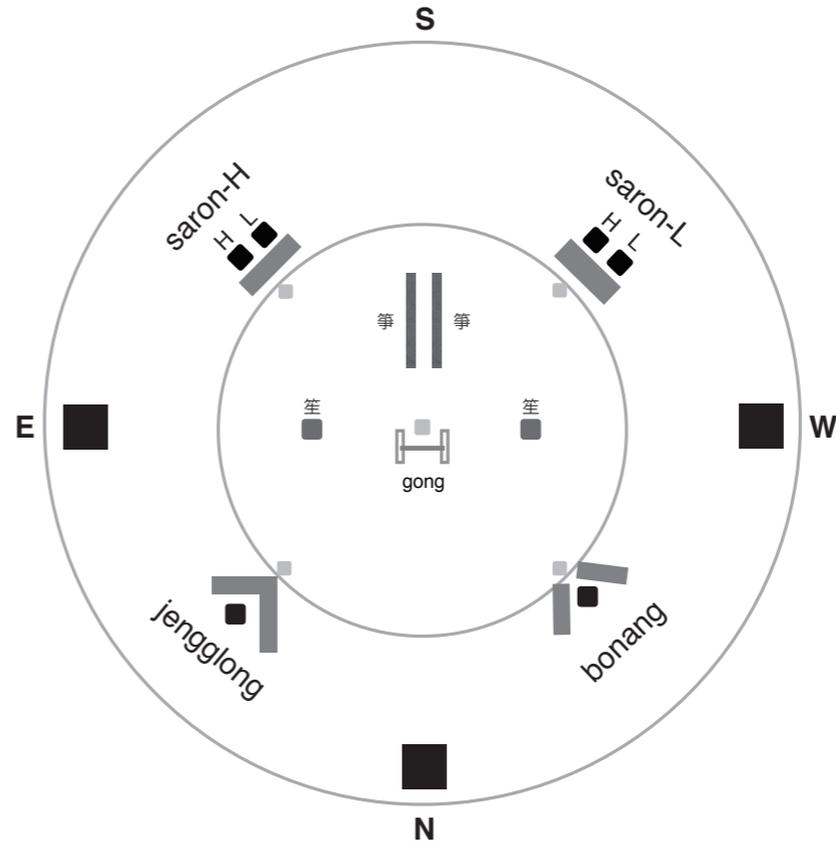
音響システム：九州大学尾本研究室

舞台美術：松元謙征

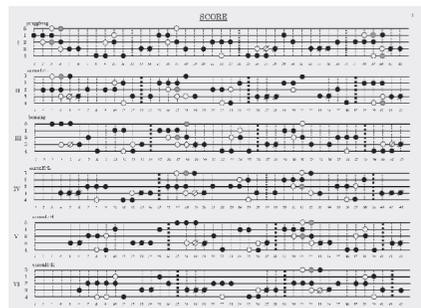
広報デザイン：池田美奈子、石原伊都子

制作：九州大学ソーシャルアートラボ

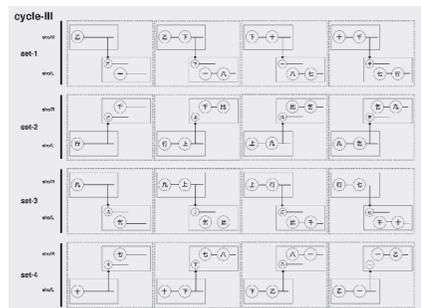
制作協力：津田三朗



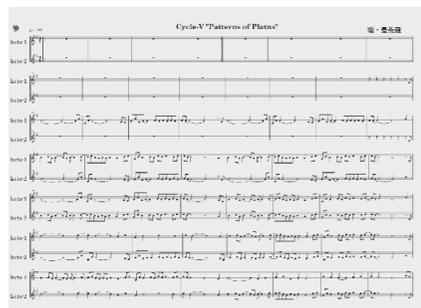
# 創作ノート「すべては、機音からはじまる」 藤枝守



SCORE



cycle-III



Cycle-V "Patterns of Platns"

初めて博多織の工房を訪ねたときのことでした。「トーン、ト、トントン」と織機の音が部屋全体に鳴り響き、最初は、騒がしく感じられました。しかしながら、しばらくその音に聴き入っていると、なぜが自らの呼吸の間合いがその機音にシンクロし始め、静かに揺られているような気がしてきたのです。

そもそも、なぜ博多織に興味を抱くようになったかという、それは、偶発的なことでした。あるとき、学生の池永照美さんが僕の研究室を訪問され、いきなり「博多織の音に興味ありませんか」との質問。池永さんは、僕が焼酎の蔵元で酩酊音を収録しているという新聞記事を読んだそうで、織りの音をもつ可能性を問いかけたのでした。じつは、その少しまえ、ピアニストの寒川晶子さんに会ったときに、寒川さんが「いま、織物の音に興味があるんです。京都有ちで、織りの音を身近に聞いていたんです。ピアノと織機って少し似てますし、なにか織りの音を使ってできないかな」と語ったことを思い出しました。そのような経緯もあり、すんなり池永さんの話に耳を傾けることができたのです。そして、さっそく、織りの現場に行くことに。それがきっかけとなり、織りとのつきあいが始まりました。

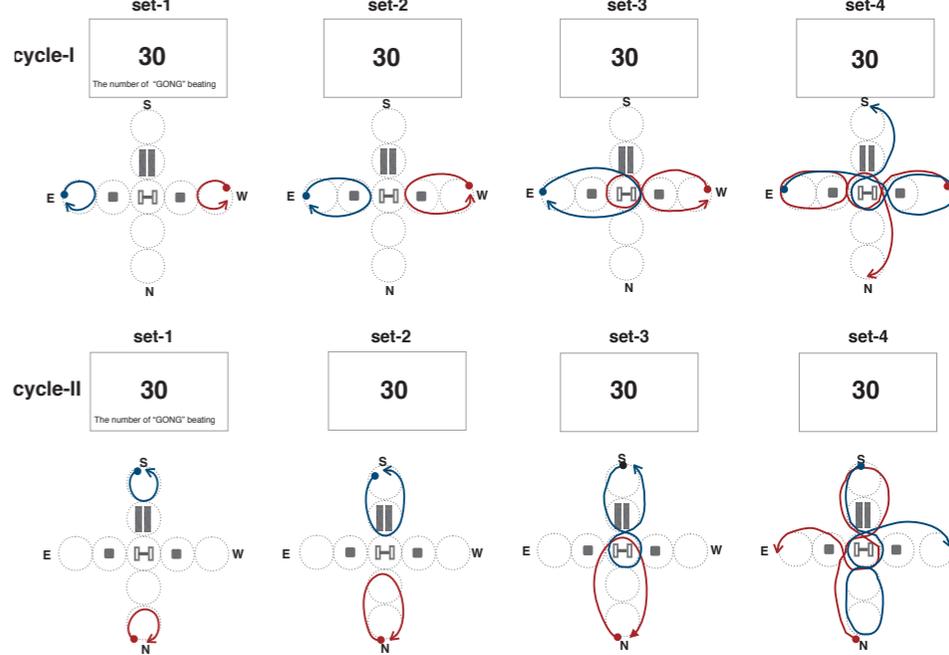
博多織には、京都の西陣織と同じようにジャガード機というメカニズムが用いられ、経糸を上げ下げする操作が「紋紙」というパンチシートによってデータ化され、文様が織り込まれていきます。まさに、デジタルの「0-1」思考が文様を生みだしていたのです。また、数千本の糸が絡み合う博多

織の織機は、その胴体も大きく、メカニズムも複雑で、織師の両手両足の反復する動きによって織機全体が躍動感に溢れて駆動します。そして、織機に近づいてみると、さまざまな箇所から独特の「ふるえ」のパターンをみだすことができます。われわれが耳にするのは、織機全体が発する音ですが、このような個別の場所から「ふるえ」だけを取り出すことができないだろうかと思い、織機の胴体にダイレクトに数個の振動センサーを付着させて収録してみました。

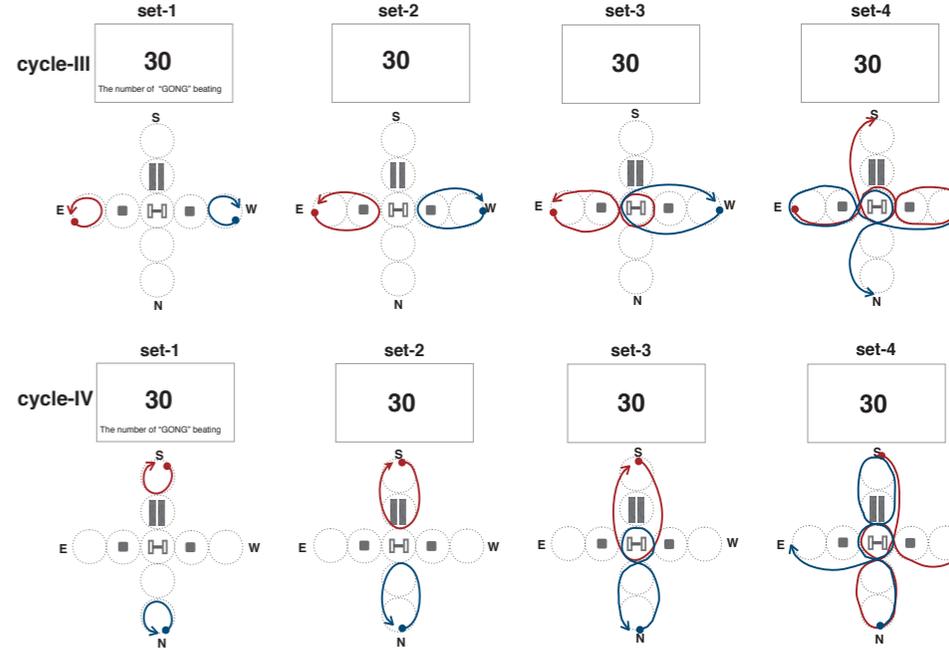
織りの機音から舞台作品をつくる。このような着想から実際の作曲作業が始まったのですが、そのために、なんとか宮嶋美紀さんの織りの工房を訪ね、機音の収録作業を行いました。織機の腕木や分銅、ペダルなどにセンサーをつけてみる。すると、宮嶋さんの反復運動に呼び出されるように、さまざまな振動パターンがコンピュータのディスプレイ上に波形として写し出されていきました。それらの波形は、博多織の文様のようにみえてきたのです。不思議でした。これらのさまざまな波動をもとにして、「曼荼羅」というコンセプトを作品のなかに持ち込んでみました。つまり、織りの鼓動としての機音が中心となり、曼荼羅という秩序のなかにあらゆる事象が関係づけられるような舞台を構想してみたのです。そのときに、宮嶋さんによる日常的な「織りの時間」をそのまま舞台上での時間に設定してみました。その切り取られた1時間ほどの機音のなかには、宮嶋さん自身の身体的な状態や無数の糸と織機との関係、織機

が置かれた環境の変容など、じつに、さまざまなものが含まれています。この1時間ほどの機音のシークエンスに基づいて舞台上でのパフォーマンスが展開していきます。まず、機音が曼荼羅の舞台からきこえてきます。その機音の律動は中央に据えられた銅鑼の響きによって写しとられていくのですが、その銅鑼の一音一音は、じつは、宮嶋さんの呼吸の間合いであり、その呼吸に合わせながら、舞は、対称のかたちを保持しながら、舞台に「舞の刺繍」を施していきます。そして、四方に置かれたガムランは、織機のさまざまな箇所の「ふるえ」を金属の響きに変換させ、東西に座す一対の笙は、十七管の円環の竹を「響きの曼荼羅」にみたく、一管ずつに息（気）を与えながら、舞台を響かせていきます。さらに、経糸に見立てた二面の箏の絹糸は、「響きの曼荼羅」となった笙の音に彩色を施していきます。このような舞とさまざまな響きが曼荼羅の東西南北の四つの方位を一巡したあとに、《植物文様》という音楽が演奏されます。機音のゆったりとした律動にテンポを合わせ、植物の電位変化のパターンから生まれたメロディの一節がひとつひとつ織り込まれていく。そして、織姫伝説の七夕（棚機）の起源でもある古代中国の乞巧奠の祭壇のようにみえる舞台の前庭では、「棚機女～たなばたつめ」の化身となった二人の舞が「巫女舞」をカミに献上して「織・曼荼羅」は終わります。

舞・経路図1



舞・経路図2



## 織り手から見た「織・曼荼羅」宮嶋美紀氏に聞く

### 伝統とは

伝統という言葉は、一般には「古臭くて高価で、自分にはわからないもの」という認識で捉えられがちだと思いますが、私はまったく逆なんです。伝統というのは日々の人間の生活の中で使われて残されていったもの、ただそれだけです。博多織は、1236年に博多の商人が中国に渡り、6年間勉強し、技術を修得して帰ってきて伝えたと言われています。来年で、博多織が始まって777年ということになるのですが、それはあくまで一説で本当にそうかは誰も知りません。最初は、私もどうしてこんな柄ができて、誰がどんな思いで残してきたのか、なぜ残ってきたのかを本当に知りたいと思って色々調べていました。しかし、こうやって織り続けていくうちに、いま博多で生きている人たちを見て、昔と変わらないのではないか、これからも大しても変わらないのではないかと思うようになってきました。昔にも藤枝先生みたいな人がいて、今回の「織・曼荼羅」のように何かを伝えようとした、残そうとしたのではないか、つまり今やっていることがそのまま伝統であることにつながると感じています。伝統に関わる人間は今だけを見ることはないと思います。自然と過去を振り返る。振り返ってみると結局同じことの繰り返しなんです。いつの時代も、もっとやらなければならないと思う人が出てきて、どんどん新しいチャレンジ

ジをしてきた。私も今は自分が何をすべきかを体感しながらやっています。

### 機音の振動の収録について

今回、織の音を録っていただいたのですが、最初は何がいいのか分かりませんでした。なぜこの音を収録するのか、普通の空気を伝わる音なら分かるのですが、織機の振動を録るというのはどういうことなんだろうと。記録していただいた波の画像を見ても自分の音はこんな音なんだと思うくらいだったのですが、たまたま自分がとても疲れているときに収録があって、そういう状態で織るというのは自分をむき出しにすることだと実感しました。そこを通過した上での話ですが、振動はもしかしたらものづくりの根本にあるのかもしれないと思うようになりました。博多織はたくさんの糸を使いますが、緯糸は細い糸を13本合わせて、それを1本の「緯糸」として織り込んでいきます。合わせた緯糸は、織る前に1週間ぐらいは寝かせた方がよいのですが、すぐに使わなければいけない時もあるって、そういう時には振動を与えれば良いんじゃないかと感じています。これは持論でまったく感覚的ですが、最近自分の手で糸をポンポンと叩くとすぐに整うと思っています。織り上げた生地を見ていっても、何となく変わっていくのが分かるんです。湿度などの影響で収縮することはありますが、それだけで

なく、何か糸と糸が合っていくような現象を感じるがあります。

9月の収録のときに織っていたのは柄に癖がありました。ジャガード機が昇降する時にちょっと重たいところがあったのでやりにくかったのですが、不思議と柄に関しては織りやすくそれが音に出たのかなという印象でした。柄によって身体への負荷や力のかけ方が変わってくるのかもしれないと思いました。そんなこと普段は意識していないし、同じ調子でなければならないと思っていたのですが、変わるということを良しとしてもいいのかなと、そのときに感じました。

1日に織れるのは3、4時間ぐらいです。1日中織る時もありますが、平均するとそんな感じになります。織るというときは、もう朝からイメージをしてどういう風に身体を使うかを意識しています。何も考えなかったらエンジンのかかりが非常に悪いですね。織るときには色々考えます。ただ一瞬すぐ考えてしまうのですが、音のせい、考えていたこと、悩んでいたことが、ずっと糸がほどけるような感覚で流れていく気がします。織り手はみんなそう答えると思いますね。集中すると坐禅に近い感覚です。音が集中の入り口になりやすいということかもしれないですし、逆に集中していなかったら、音が乱れて、それがそのまま糸に出て、作るものに出てしまいますから。



### 藤枝守 | 作曲・構成

カリフォルニア大学サンディエゴ校音楽学部博士課程終了。博士号 (Ph.D.in Music) を取得。植物の電位変化データに基づく《植物文様》を展開。ソーシャルアトラボにおいて、「襦の音なひ」や「松楠居の茶三昧」の制作に関わる。現在、九州大学大学院芸術工学研究院教授。



### 宮嶋美紀 | 織匠

2010年、博多織デベロップメント・カレッジに5期生として入学。2013年に卒業し、福岡市博多区の「おりおり堂」で創作活動に入る。2014年、「第112回博多織求評会」で経済産業大臣賞を受賞。博多織手織技能修士。



### 黒岩俊哉 | 映像

1966年生まれ。実験映像作家。九州産業大学芸術学部芸術表現学科メディア芸術専攻教授。同大学院造形表現研究科教授。近年では映像 / 舞台 / パフォーマンス / 音楽が融合するメディア芸術作品を多く手がけている。



### 石川高 | 笙

雅楽団体「伶楽舎」に所属し、雅楽古典曲や現代作品を演奏している。笙の独奏者としても、様々なアーティストと共に、新たな音楽の次元を開拓してきた。



### 田島和枝 | 笙

タングルウッド音楽祭、坂本龍一のCD参加等、雅楽古典曲から現代曲まで多方面で演奏活動を行う。雅楽演奏団体「伶楽舎」に所属。「おとのひとひら」主宰。



### 中川佳代子 | 箏

1994年青山音楽賞。1998年文化庁芸術研修員認定。2002年賢順全国箏曲コンクール最高位「賢順賞」受賞。2013年京都市芸術文化協会新人賞受賞。京都、松尾大社の観月祭にて奉納演奏を行う。



### 丸田美紀 | 箏

"Natural" に、表現としての箏の音世界を、その柔軟な感性と適応力で多岐に渡りコラボレーションを展開。ソロアルバム「鳥のように」をリリース。沢井忠夫・一恵に師事。



### 有泉汐織 | 舞

8歳よりクラシックバレエを始める。2013年立教大学現代心理学部映像身体学科に入学し、チョン・ヨンドウ氏に師事。2016年9月より Nect ダンサーとして所属。現在は流留ダンサーとして活動。



### 杉本音音 | 舞

4歳より新体操とクラシックバレエを始める。2015年立教大学現代心理学部映像身体学科入学。現在は、チョン・ヨンドウ氏に師事のもと、流留ダンサーとして活動中。



### 裴永珍 | 銅鑼

韓国古来の伝統的打楽器であるチャング(杖鼓)の演奏家。ソンジュ農楽競演大会で最優秀賞・大賞を受賞。様々なジャンルの演奏家との共演を通して、日韓伝統音楽の新たな試みと独自の音世界を探索している。



### バラガナ・グループ | ガムラン

1985年結成。インドネシア・スダ(西ジャワ)音楽のグループとして、東京を拠点に演奏活動を行っている。古典曲の他、現代作品も精力的に演奏し、幅広く活動している。



### 福岡ガムラン倶楽部「LOU」 | ガムラン

2016年より本格的に始動。福岡を拠点とするスダ・ガムランのグループ。アメリカや日本の現代作品にも積極的に取り組む。